村野次郎創刊

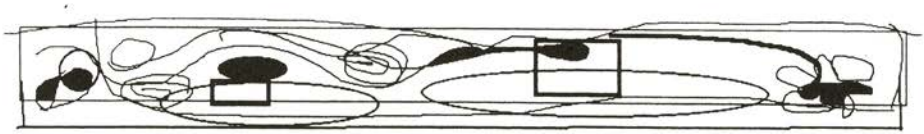
香蘭

2022年（令和４年）４月号

小特集　誌上新年本社歌会

第 99 巻　　第 4 号　　通巻 1096 号

二〇二二年（令和四年）四月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第九十九巻第四号



香　　蘭

2022年（令和４年）４月号
小特集　誌上新年本社歌会
第99巻　第４号　通巻1096号

目　　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（80）……有馬　智賀子……表二
近詠十五首　のぶちゃん……市川　義和……2
作　品
一……4
二……24
三……48
推薦香蘭集……55
香　蘭　集……56
作品一特選（二月号）……飯島・石井・伊藤（美）・大井田・岡野・柏原（義）・鈴木（桂）・髙畠・中村（か）・宮原……16
作品二、三特選（二月号）……江口・大島（昌）・庄司・竹本・田中・藤本・有馬・伊藤（久）・内海・澤田・西﨑……18
村野次郎への旅（144）……千々和　久幸……20
一頁公論（11）一心のすすめ……西野　美智代……23
小特集　令和四年　誌上新年本社歌会……33
エッセイ・自由研究　『ウタカイ』を読んでみたので……沙阿　羅……60
焦　点（二月号）一点凝視……青山侑市……62
岩田明美「猫」評（二月号近詠十五首）……江口絹代……64
七　首　抄（二月号）……黒羽（紘）・桑山・中野（美）・大塚……65
作　品　評（二月号）作品一……千々和　久幸……66
作品二……松沢　みどり……68
作品三……関　哲行……70
香蘭集……丑山　眞弓……72
緑　地　帯……髙畠・藤本・安田……74
耳言あれこれ（5）……田中　あさひ……77
明宝研究会第一二五回一月例会　絵画と短歌の関わり……中村　陽子……78
歌会及び会合・会員消息・他……90
編集後記・新宿日記……94
表紙絵……中村　陽子「浮遊」　目次・緑地帯カット……和田　和雄……表三

村野次郎作品　私の愛誦歌（80）

こころしめてたしかにゐしが晦日（みそか）来て
つもる経費にこころくさらす

『樗風集』

有馬智賀子

この歌が詠まれた昭和五年がどのような年であったのか私は知りません。しかし、『樗風集』の頁をめくっていくうちに、はたと目についたのがこの歌でした。

こころしめてたしかにゐしが晦日（みそか）来てつもる経費にこころくさらす

小難しい評は書けませんが、ここには今でも通用するようなことが描かれ、又、日常の庶民の生活が手に取るように見えます。あたかも庶民の代弁者のようにも。月末の家計や会社経費のやりくりに頭を悩ませておられる姿が彷彿と目に浮かぶようで、微笑ましささえ覚え、身近に親しみを感じます。

まさに手堅く慎重な生活者として人生的現実を歌にされた先生のお姿を自分なりに垣間見た気がしました。以上のような次第で、私の好きな歌としてこの歌を推したいと思います。

（短歌新聞社文庫『樗風集』85頁。『村野次郎三百首』には掲載されていない）

四選者の作品

選歌

平塚　千々和　久幸

冷えしるき大寒の入りヤッケ着て朝より選歌し選評を書く
昨日とは寸分違わぬ風景を窓に眺めて選歌を急ぐ
美しく哀しくそして嘘くさき歌なれば迷うことなく捨てつ
口真似の上手な鴉がまた鳴くよ「恋と革命、恋と革命」
自歌自注なせるを聞けばこの人も謙遜自慢になるが嬉しも
選歌をし選評を書き一日が暮れたりあとは飲むだけである
今日いまが遠い昔に思われてきみと飲んでる影絵のように
元気だった妻が難病に苦しむを黄泉の父母は知らざる

河口の虹　　我孫子　丸山　三枝子

またしても言いそびれたりむらきもの心に言葉追い付かなくて
大寒の日の夕まぐれ春を呼ぶフリージア買いにスーパーにゆく
ナポリより虚空を駈けて届きたり生日前夜〈よき夢見よ〉と
摩天楼の夢を見ていた　青空の雲かきわけて飛翔していた
夢の記憶おぼろとなりて一日の犬の薬を整えている
目をあけて居れなくなった老犬は身を寄せて来てそれから瞑る
電話には夕焼けチャイムの聞こえつつ、高圧線を鴉がよぎる
雨あがりの河口より立つ虹のあり明日は歯科医の定期健診

群青　　東京　桜井　京子

秋草が冬草となり夕つ日に照りて川辺は草もみぢせり
ほんたうのことを真つすぐ伝えくる人のやうなり曙杉は
藍でなく青でもなくて群青を見たしと思ふ夕ぐれは来つ
点らざる街灯ひとつ　点らずに冬に入りたりまた旅に出む
明け方のこむらがへりに効くはずの芍薬甘草湯この冬効かず
もう落ちる気のない花梨ゆきの日はゆきを被りて行くあてがない
不織布のマスクしてゆく東京のけふ寒の入りしいんと冷えて
ビル街のきのふの雪がよせられて欅の根方は耐えてゐるなり

カンファレンス　　横浜　渡辺　礼比子

「目の脇の骨を一本外しましょう」頭上で医師らの意見一致す（形成外科カンファレンス）
「手術中骨を一本外すけど戻しますから」こともなげに言う
何もかも忘れてのんびりせよと言う　それがもっとも苦手なのだが
「最悪のケースを医者は言うものよ」友が電話に慰めくれぬ
食べられて安眠できて〈くよくよ〉にも効くとう薬を貰って帰る
日もすがらPCRの結果待つ「陰性ならば電話はしません」
わたしなんかダメと思えば出るはずの力も出ない　わかってるけど
柚子味噌もジャムも作ると柚子百個貰いくれたり主婦の鑑が

作品一特選

（二月号作品から）

渡辺　礼比子　選

黄花コスモス　　川崎　飯島　智恵子

側転をしながら道を駆けてゆく風の中なる落葉目に追う
長いこと放置されいし駅前の空地に今日よりユンボの入る
年ごとに黄花コスモス数を増し空地は今や黄色一色
着ぶくれて女男の区別もつきかねる我と見ていん嘴太鴉
「あまんどう」と故郷では言った豆柿のたわわにみのる禅寺の庭
十年をかけてようよう実りたる柚子の一顆を灯のもとに置く

・対象の一つ一つの表情を濃やかに捉えて詠む。ユーモア精神も健在。

味噌ラーメン　　習志野　石井　雅子

道の駅「紅こまちの郷」さにつらふをとめと思ふ紅さつまいも
スマホの画面だけで会ひ来し二年間　おばあさんはスマホに住む人
夕空がピンクベージュに染められてあなたに逢へる予感してくる
老いらくの恋といふのもいいかもね百年足らずの人生だから
暮れ泥む街の喧騒の中にある味噌ラーメンのやうな哀しさ

・酸いも甘いも嚙分けた小粋な大人の味わい。軽やかさが心憎い。

まだ見ぬ島　　川崎　伊藤　美恵子

引き出しの奥に眠れるマフラーの黒が息づく　冬が近付く
ああ年だ心が傷つく何でもないこんなところで転んだりして
大切な人の多くに先立たれ昼顔とわれが取り残される
焼酎の〈壱岐〉をもらいぬ壱岐島は玄界灘のまだ見ぬ島なり
から松の金に染まれるこの山の小春日和は老いに優しも
貶されてへこんでやがて立ち直り九月の風に吹かれているも

・年齢を嘆きつつ、バネのようにしなやかな精神の柔軟さが魅力。

花柄のタオル　　川崎　大井田　啓子

花柄のタオル一本加へたり入院中の夫への荷物に
病室の夫の時間に白雲は流れてゐるや　キッチンにゐて
今すぐになすべきことなどありはせぬ外でカラスがしきりに呼ばふ
透明なアクリル板のむかうなる夫との面会こゑ張り上げて
渾身の力で椅子より立ちあがる夫にわれらは拍手送りぬ
子は住まず夫をもらぬこの家に壁の時計が休まず動く

・闘病中の夫へのエールが率直に詠まれ、こころあたたまる歌。

夕時雨　　尾道　岡野　甫江

夕時雨はらはら照りて輪のなかにわが島入れて虹のたちたり
凪ぎわたる海いくつもの島浮かべ立冬の今日あたたかに暮る
小春日の島径のどけし自づからマスクはづして歩数をふやす
「悪いものみつかりません」のひと言に胸の閊へがさつと引きたり
先ざきの不安もろもろさておきてひとまづ今日の生日祝ふ

拾ひたるドングリ三つ手の平に遊ばせ軽き鬱は消えたり

・大自然の懐に抱かれつつ、日々の不安を克服していく姿が羨ましい。

短歌があって　尾道　柏原義清

年どしの甘藷掘る時期とかさなりてわが誕生日は文化の日なり
披露宴に老い耄れわれも招かれて来年米寿と自己紹介する
昼に来て雑談長き友なれど吾も仕事を急がぬ齢
施設にて十年越ゆる友の妻入院十日でわが妻は逝く
「短歌があってオメエ呆けんでええのお」と退屈そうな友が来て言う
妻の逝き知りたることのひとつなり厨にやたら輪ゴムの増える

・生来のユーモリストであればこその「おもしろうてやがてかなしき」歌。

月を撃つ　西宮　鈴木桂子

小石にて撃たばパリッとわれさうな今夜見る月　冬に入りたり
コロナ禍に楽しみて見る一日に何度も映る渋谷スクランブル
子などいらぬと時に思へど子らはなほ母などいらぬと思ひてをらむ
娘のクラスに知とふ名の子を知りし頃より時代が変はり始めた
手を洗ふ水が冷たい　わが内を流るる一筋の生命確かに
木洩れ日の揺るる下ゆく思索するよろこびありて生かされてきつ

・一首目の発想の斬新さ、三首目の屈折した愛情表現に迫力がある。

百年女人　鎌倉　高畠憲子

百年を生きる女人のふんはりと被る帽子のうすきくれなゐ
終戦時どこに居たかを語りあふ声ひびきけり春の銭湯
卒寿なるインストラクターの真似をして身を雑巾のやうに絞れり
肩こりによく効くエクササイズなり畳の上の水練なるは
流鏑馬の道を園児ら走りくる仔馬のごとく靴を鳴らして
年少組マラソン大会に三歳がほつくりほつくりスキップで来る
百年を生きる女人の言葉なり「還暦ひよこ七十歳少女」

・二首目の切り取り、六首目のオノマトペ、七首目のセリフが秀逸。

村　福岡　中村かよ子

夢に出で棕櫚は黄色い花を付け私の村を教えてくれる
聴かされし村の境の大杉の月なき夜の「砂撒き狸」
野にひそむ狐と狸は化かすもの一度迷えば戻られぬ村
小さき子の甘酸っぱさが迫り来る後ろの正面だーれだ君は
二羽の鳥ねぐらは悠久の空なるか夕焼けに身を投げて消えゆく
身に迫る静けさよりは何処かで回る洗濯機の音を追う夜や
秋の陽の風船カズラの明るみに三粒の種がふいに弾けぬ

・独自のファンタスティックな世界を創出した。

秋はここから　倉敷　宮原迪恵

暗きまま夕ぐれとなる雨の日の庭にしろじろ山茶花の花
散り敷ける柿の落葉をかさこそと踏みしめゆけば故郷のごとし
朝光の斜めにさしいる二間川ささ波立てば肋骨に似る
温室の苺は石油を食べるのと同じなれどもうまし苺は
亡き人は待てど戻らずひぐれどき鍋一杯のおでんを煮たり

・常套的な発想に捉われない奔放な表現に注目した。

作品二、三特選

（二月号作品から）　　丸山　三枝子　選

〈作品二〉

皇帝ダリア　　柏江口絹代

うっすらと陽のさす方に向き直る　夫逝きてより三ヶ月過ぐ
房子さんと今日は会えると思う朝、母を置きざりにする日とも思う
悲しみが深まる程にふさふさと皇帝ダリアが咲き誇りゆく
向こう岸の杭に止まれるみさご一羽さびしき秋を抱えているか
母と娘が共に老婆となりてより仲良く食べる麻婆豆腐

・二首目の葛藤は五首目のウィットで和らいだ。悲しみは続く。

雲は流れて　　東京　大島昌子

靴下を繕いている吾を見て百円ショップにあると子は言う
靴下を繕いながらこれもまた吾と同じでまだ役に立つ
夕べには白き花びら散らしつつ山茶花咲きつぐ初冬の庭に
何気なく労られいると思うときみじめになりぬ　雲は流れて
三味線の音が聞こえればほっとする嫁は仕事から無事帰りしと

・四首目の自虐に込められた思いは、結句の転換で読者が解放された。

椅子ひとつ　　横浜　庄司健造

いささかは良きことあらん来る年は酌む約束の賀状書きおり
立冬の鶴見川にも水鳥の小さな群れの降り立ち始む
教室の長机には椅子一つひとつの椅子のさびしかりけり
もどかしく発車のベルを聞きながら一段一段確かめ下る
カミソリの切れ味鈍くざこざこと髭を剃りたり皺のばしつつ

・徹底して日常の些事に拘り、その些事が持つ親しみに拘って詠む。

経年劣化　　千葉　竹本幸子

コロナなど終息したのか外苑のいちょう並木の人混みにいる
社員証の写真を新たに撮り直しわれの五年の変化がこれか
六十歳過ぎて五年を見比べて「経年劣化」しているわれは
出勤の仕度をしつつ朝ドラの別れの場面に化粧が止まる
定年の夫との家事の分担は風呂と洗濯おまかせしたり

・二～三首目の「経年劣化」に見られる感覚で、身の境遇を揶揄する。

朝は来た　　取手　田中あさひ

容色のおとろへ著しわが庭の女王たりし日の過ぎてあぢさゐ
通勤の日々はるかなり渾身に夜闇ふるはす秋の虫たち
退職までをおもひかへせばひとことのみ「何があっても朝は来た」
迎合もせず世をはばからず在ることの幸ひならむ災ひならむ

・四首目の処世術と言うか、生き方の姿勢や自己省察に説得力がある。

あの下駄　　常陸太田　藤本佐知子

遠き日にわが投げ上げたあの下駄を隠していそうなわた雲がゆく
尾のタクト振りつつ囀る鳥のいて畑の大根すんすん伸びる
この道に監視カメラのあらぬゆえ落ちてるゴミはわたしが拾う
落葉掃きけんちん作ろう歌詠もう今日は朝から重ね着をして
あんな事あったねなんて語り合う時間が増えたり　換気をせねば

・三首目のシニカルな視線に、表裏のない作者の気持ちが見える。

〈作品三〉

鶺鴒の急用　　長崎有馬智賀子

よく晴れた夜空に輝く星一つ同じ位置からエールをくるる
大銀杏に朝から鳥の集まりてそこから順にとび立ちて行く
墓地に立つ石仏四体背をのばし後の空地に日陰をつくる
鶺鴒は急用ありや鳴きながら白き腹見せ飛んでゆきたり
晩秋の風に吹かれて揺れている末枯れたままの紫陽花の花

・自然を詠んだ叙景歌に擬人化を加味して、表現の幅を広げた。

青の向こう　　千葉伊藤久美子

会釈して透明パネルに頭突きする未だ測れぬこのディスタンス
生まれつき人気者なる宿命などどこ吹く風とパンダはまろぶ
風のない窓の外から街路樹が衛兵のごとこちらを見てる
枯れたなら散ってみようかとりあえず　その後の事は地に着いてから
果てしなく青の向こうに青があるただそれだけの空を眺める

・五首目に注目、上句と下句の緩急のあしらい方で歌を膨らませた。

お地蔵さん　　川崎内海恭子

かけっこの一年生は応援の親を見つけてスピードおとす
たいていの野菜は作る従姉いて長芋づくりの話ながびく
みどり児を抱く女性は立ち止まりお地蔵さんを拝んでゆけり
青空に笑顔ばかりが浮かびくる中学の友が逝ってしまえり

・個々の人物の行動や表情を掬い、その特性をつかんで詠む。

新しきブーツ　　島根澤田久美子

この風はもはや木枯らし冬帽を引きおろしつつ参道のぼる
コロナ禍にて縮小されし秋祭り銀杏落葉もしめやかに降る
あれはいつ　かざぐるま一つ参道に残されて空回りしてゐた
晩秋の日溜まりの中をゆつくりと隣の猫が横切つてゆく
新しきブーツ鳴らして街をゆく地下の茶房も久久なれば

・冬帽、かざぐるま、ブーツ等季節感のあるキーワードで景物を写す。

アサギマダラ　　大分西崎廣江

久々に久住花公園訪ねればアサギマダラの来園とあり
旅をするアサギマダラに藤袴ここよここよと香りを送る
旅の途のアサギマダラよ紫の藤袴の辺群れて憩える
思いの外アサギマダラは大きくて子等とスマホに納めておりぬ
渋柿を軒に吊して干したての柿を描きぬ　渋柿ぞよし

・旅の途上のアサギマダラ一連、軽いタッチのスケッチに工夫がある。

のぶちやん

市川　義和

かぜのとの遠き日々あり弟と呼び交はしゐき「のぶちやん」「にいちやん」

発症は五十七歳　おとうとは〈骨髄異形成症候群〉とぞ

入院は築地のがんセンターなり　わが職場から十五分なり

看板に「がんセンター」と書かれをり平がなであるつくづく見れば

我が細胞、移植ドナーに適合と判明したり還暦近くに

幹細胞採取のために入院す五泊六日同じ病棟に

おとうとに我が幹細胞移植のあと生着成らず　夕あかね雲

臍帯血移植に寛解の日もあれど入退院を繰り返しゐき

ひたむきに仕事復帰をめざしゐて日経新聞日ごと読みをり

病室で母校の映像ともに見て声合はせたり〈男子部讃歌〉

次女直ちやん氷ひと粒含ましぬ満足顔をそばで見つむる

近詠十五首

見舞ひたる二日後朝に電話受く昨夜逝きしと長女智ちやん

十年の闘病の果て力尽き逝きてしまへり我がのぶちやんは

弟の生まれ変はりよ一年後次女に太一くん誕生したり

令和三年十月五歳の太一くん住吉神社で七五三祝ふ

ひと言随想

亡き弟のこと

２０１５（平成27）年11月に約十年の闘病生活を経て67歳で逝去した弟（信義）のことをまとめたく考え、連作に挑みました。しかし事実に引きずられ、詩に昇華できていない力不足を痛感しています。

「骨髄異形成症候群」というやっかいな病気でしたが、家族の支え、主治医のお陰もあり、約十年よく耐えたと思います。その原点は仕事復帰を強く願う意志でした。

私の造血幹細胞がミニ移植に適合と判明し細胞採取のため私自身も弟と同じ病棟で五泊六日の入院を体験しました。移植は不首尾に終わりました。後日、臍帯血（さいたいけつ）移植が成功しましたが入退院を繰り返し力尽きました。

逝去翌年の秋、次女に男子誕生、まさに弟の生まれ変わりです。その太一君は昨年秋に５歳となり、七五三のお祝いを自宅（横浜市青葉区）近くの住吉神社でしたと聞きました。

村野次郎への旅（144）

大正期の「香蘭」（五）

千々和　久幸

前稿に引き続き昭和一（大正十五）年二月号の「香蘭」を見ていこう。この号は全52頁だが目先の変わったところでは、その中程の36頁に「十四年度同人作歌表」が出ている。

北原白秋以下同人四〇名の前年度一年間の作歌数が月毎に一覧表にまとめられている。いわば会員へのサービス欄だが、同様の試みはわたしが「香蘭」に入会して一度だけ見たことがある。左にわたしの注釈を加えて抜き書きしてみよう。

・年間最多作者　南部松若丸　129首
・同最少作者　鈴木幸哉　7首
　筏井嘉一　7首
・北原白秋　33首
・村野次郎　97首
・石野正太郎　90首
・冬野木枯　96首
・深野庫之介　69首
・池上秋石　47首
・杉浦翠子　42首

当時の「香蘭」では、月毎の出詠数が明確に規定されていた訳ではないが、今日と較べてどうだろう。現在は選者の場合で、毎月8首×12月＝96首。「香蘭集」は年間で48首。

わたしは「香蘭」入会当時、村野先生に恐る恐る月間の作品数をお尋ねしたことがあった。先生のお答えは十五首内外だったと記憶している。彼我の力量差も省みずこんなことを聞いたのは、今に思えばまったく滑稽だったが、初心者のわたしは100首前後は作り、10首くらいを投稿していた。

さて本号には本間樂寛が「香蘭の歩み來し道」（二）を書き継いでいる。「其三　地上巡禮時代　上」から引く。

大正三年九月、六五版で約五十頁、全紙面を赤い罫線で圍んだ、極めて高雅な詩歌雑誌が發刊された。それが即ち地上巡禮である。之より先、大正二年一月、北原白秋を主宰として、朱欒時代の熱心な投稿者によつて、巡禮詩社が創立された、それは飽くまで純眞な飽くまで敬虔な、路上に鈴振り鳴らす巡禮者の心をもて、詩歌の道に只管精進せんとするもの、集ひであつた。（中略）

けれども雑誌の發刊に先だち翌二年、白秋氏は何を感ずる所あつてか漂然（ママ）として小笠原島へ渡つてしまはれた。之が爲、詩社の事業も一頓座するの止むなきに至つた。さは云へ椰子樹の葉陰に四時鶯や瑠璃鳥が奏で、海も空も岡も燦爛とし白金色に耀やく、この絶海の孤島の生活は氏をして魂の底まで赤裸々な眞に還らしめた。今でも氏に見るあの天眞爛漫さと、童兒の如き無思邪（ママ）な心境とは、確かにこの半ケ年程の弧島生活によつて齎らされたと頷かれるものがある。そして島から歸ると共に、氏はその潑溂たる元氣と、躍動する眞實心を以て、地上巡禮の發刊を急いだ。

白秋の小笠原行とその後の変身ぶりを語ってなかなかの名文、と言うより美文である。白秋に心酔し、白秋の謦咳に接した者の実感が言わしめたものであろう。

さて今月も読者の多い「前月歌壇合評」を覗いてみよう。評者は橋本敏夫、杉浦翠子、矢代東村、村野次郎である。

・朝いまだくらき港に入りてくる船の前波白くあるかな　（潮音）小田觀螢

（敏夫）小樽港の朝景色である。そして唯それだけの歌である雑報歌の部類に入るべきものである。「朝いまだくらき港」「船の前波」の不洗練はまだいゝとしても、「入りてくる」「白くあるかな」は鈍ぶ過ぎるであらう。自然に對してらくな氣分で面接するのはいゝが、かう呑気では困る、「白くあるかな」もつと締めて、作者の感壊（ママ）のにじみ出るやうな表現法は無いものであらうか。

（翠子）「船の前波」は可笑しい。分け入る船に立つ波のと云ふところでせうね。こんなに、難しく被仰らなくともこの位の抒景（ママ）なら、たいした技巧を用ひずとも短歌になれますでせうに。

（東村）僕なんかとは全然ちがつた表現法（主として心の据ゑ方）をとる人らしい。

（次郎）前波、後波などと自分勝手の言葉はよくない。此の情景は「あるかな」と氣樂に詠すべき所ではない。薄暗い中の白波を詠ふのである。これでは其の長閑な畫の氣持が來てしまふのである。

・日ねもすを何すとなしに暮るる秋の灯ともし頃は腹へりにけり　（水甕）岩谷莫哀

（敏夫）「灯ともし頃」で少し粉飾してはゐる。がすつぱりと云つて退けた所却つて泌々とした感を持たしてゐて下句無難に近い。然し、幽玄風とでも云つたやうに、素直さを缺いて姿態を作つた上句に甚しく邪魔されて其全力を一首の上に至すことが出來なかつた。

「日ねもすを」の「を」「何すとなしに」の「に」共に助辭の使用法としてはうまいものであるが、「日ねもす」「何すとなしに」などと悪く澄まし込んだ上更に其れに續いて「暮るる秋の」と觀念的な物云ひをした爲に些かの感をも彷彿せしめない、折角の結句が役立たない所以である。

（翠子）長塚節氏のお歌にもよく斯う云のを見たものですが、病者と云ふ境遇から體驗する感情は誰も一所に一致してゆくものらしい。早くご健康になられて、野にいでて見給はむことを祈ります。

（東村）一寸心惹かれる作ではあるがことさら秋を入れたのが氣になる。難は三四句にある。

（次郎）「暮るる秋」は無理に間に押し込んだ句である。言葉だけで少しも感じを生じて來ないし、一首の調を破つてゐる。境地は悪くはないが先入主なるこの言葉をどうしても使はなければ居られない程度の過程に作者は現在ゐるものと見るのである。

歌壇（他結社）合評（作品鑑賞）でありながら、今月もなかなかに手厳しい。恐らく「香蘭」作品も他誌で合評されているのだろう。その意味では熱い時代だったのだ。

現在の「香蘭」には他結社の佳作を転載することはあっても（歌集評は随時掲載）、合評欄はない。結社間の交流も殆ど無い。

時評欄が欲しいのだが、現在のところ書き手が見当たらず、選者もそこまで手が回らないのが実情である。